

能登半島で発見されたオニバスの意義

高木政喜・本多郁夫

Significance of the appearance of *Euryale ferox* in Noto Peninsula

Masaki TAKAGI and Ikuo HONDA

はじめに

2011年9月27日に「輪島市のため池でオニバス (*Euryale ferox*) が発見された」という情報を受け取った。余りにも意外な植物名とその生育地が能登半島であることにさらに驚いたのである。発見者は、川内一憲氏 (福井県両生爬虫類研究会副会長) と藤井 豊氏 (福井大学医学部教授) で、高田型トノサマガエルの調査中に偶然オニバスを発見したとのことであった。

オニバスは、いしかわレッドデータブック2010では1969年以降確実な目撃記録がないので、情報不足種として評価されている植物である。また、本種のかつての生育地については、河北潟周辺にのみ生育していると石川県天然記念物調査報告 第二輯に記述され、能登半島の分布は知られていない。

オニバスが発見されたため池の立地環境

オニバスが生育していたため池は、標高170mの視界の開けた水田地帯の真ただ中に位置している。水田は斜面上に棚田を形成して西側から東側へと次第に標高を高くして、やがてスギ植林地に続く。そのため水田地帯からは、日本海が一望できる景観にあるが、季節風の強さが予想される。

池端弘氏 (ため池所有者) の話では、およそ50～60年前に、道路沿いの田んぼの南側端からため池を造りはじめ、少しずつ広げて現在の30m×30mの大きさにまで拡大したとのことであった。当初から、ため池周囲はもちろん、池の中にも植物の移植は一切していないとのことであった。しかし、現在では、周囲には草本類ではナワシロイチゴ、セイタカアワダチソウ、ハチジョウススキなどが見られ、木本類ではタチヤナギ、ネムノキ、ケヤキ、イタヤカエデなどが垣根状に低く取りまいている。



図1 ため池周辺に沿って生育するオニバス (2011年9月29日撮影)

オニバスの現状

浮葉植物のオニバスは、ため池周辺に沿っておよそ13株生育していると推定される。これは1株から出ている浮葉群を観察して、推し量ったものである。ヒシ (*Trapa japonica*) は水面全体に広がっているが、オニバスは周辺部のみに見られる。このような配置は、おそらくヒシとオニバスがもっている発芽・成長・開花・種子形成に費やすエネルギー量の違いによるものではないかと推測している。オニバスは、第4葉以降を浮葉として水面に浮かべる植物であるので、水深の深いところでは浮葉を伸ばすだけのエネルギーがなく、ため池の縁の浅めのところで発芽した苗だけが生き残り、ため池の周囲のみ生育するのであろう。池の所有者からの聞き取りでは最深部は3mほどあるとのことである。一方、ヒシは4m位の水深でも浮葉を浮かべることのできる植物なので、中心部にも生育することが可能なのであろう。

生育環境の比較

筆者 (高木) は、1969年9月、金沢市北間町大

野川沿いの金沢港工業団地用地として造成される前の放置湿田・水路にオニバスが突然発生し、大群落を形成した場面に遭遇した。その後、オニバスは保護・移植されることなく、生育地が埋め立てられて石川県から見られなくなった。

そのような当時の環境と、この度の新産地の生育環境を比較すると、いくつかの相違点が見られる。第一は生育している位置である。新産地のため池は北緯37°を超える能登半島で標高170mの丘陵地にある。北間町の大群落が、農村地帯の低地に生育していたのと対照的である。日本全体の分布域もほとんど低地に見られる。特に標高170mにあることは特筆すべきことである。第二は水質である。ため池の水源は、水田地帯上部の湧き水で、貧栄養な水質であるのに対し、大群落地は、河北潟を水源とする富栄養な水質であり、両者は対照的である。1mを超える葉群を形成するには大量の栄養分が必要であると思われる。その点で新産地の動向に注目して行きたい。第三は冬季の季節風である。ため池は、立地から冬、絶えず厳しい北西の風を受けるところにある。オニバスの全国的な分布をみると、本州、四国、九州の暖温帯を中心に分布しており、日本海側には少なく、この新産地は北限に近いものと考えられる。

このような相違が、オニバスに今後、どのような影響を与えるのか、注目して行きたい。

オニバスはどこから来たのか

新産地のオニバスについて、池の所有者は、3年ほど前から気がついていたが名前は知らなかったという。花は未だ見たことがないとのことであったが、筆者の観察では、果実は沢山できていた。オニバスでは、閉鎖花が圧倒的に多いので、その観察は互いに矛盾しない。カモなどの水鳥がよく来ているとのことなので、どこかで種子を食べた水鳥が排泄した種子によって自然分布したものであろう。誰かが種子を投げ込んだ可能性がもっとも気がかりな点であったが、地元の区長は「この町には、種子をまくような者は居ない」と明言した。また幸いなことにこの池には、アメリカザリガニやブラックバスなども持ち込まれていない。「石川県では1969年に河北潟周辺のオニバスが見られなくなってしまい、非常に貴重な絶滅危惧植物なので、保護に配慮して下さい」と所有者にお願いしたところ、快く同意して

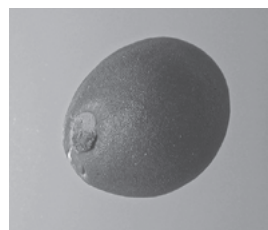


図2 河北潟産種子



図3 輪島市産種子

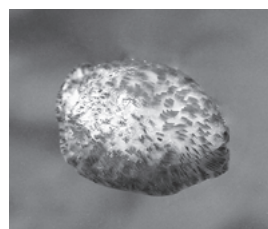


図4 十二町潟産仮種皮

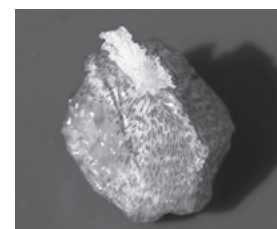


図5 輪島市産仮種皮

頂けたので感謝している。

現存するオニバスの自生地でもっとも近い氷見市十二町潟は直線距離で約60kmもあり、水鳥が1個0.75gもあるオニバスの種子をいくつも体内に留めたままこの距離を一気に飛んだことも否定できないが、種子の供給源としてオニバスが自生する未知の池沼がどこかの山中にあるとも考えられる。

一番の期待はかつて河北潟周辺に生育していたオニバスが、どこかの池沼に分布を広げていて、40年以上を経て、ようやくこの地まで分布を拡大した、つまり河北潟オニバスの末裔かどうかだが、どうも期待薄である。なぜなら、(1) 種子の形は生育地により異なるといわれている。河北潟産のオニバスの種子(図2)は、なだらかな形態であるのに対し、輪島市産の種子(図3)は、へその後方に盛り上がった部分が見られる。すなわち両者の形態は明らかに異なる。(2) オニバスの仮種皮にある紅色の斑点は、どの産地のものにも共通に見られるが、石川県の河北潟産のものは、ほとんど斑点が見られないと聞いている。これについては図4・5のように、輪島市産のオニバスは、十二町潟産と同様に紅色素を多く含むので河北潟産の末裔という夢はほとんどついていたようである。それにしても、どのオニバスがどのような経路で新天地を求めたのか、これを探り出すのも大きなロマンである。

発見の意義

今回のオニバス発見は植物地理学的にも繁殖生態学の上からも大変興味を引く貴重な事象である。今後はこの池が起点となって、近隣の池へ分布を広げていく可能性についても見守り続けたい。